おせんち山

三田高校と私

57年卒業　鈴木智晶

三田五丁目を通過して国際ビルが近づいてくると、三田高校に通っていたあの頃をほんやり思い出している。卒業後めったに足を運ばないこの通りだが、時折車で通る度懐しい気持ちになってくる。中三の受験期に入院して高校入試を逃してしまった私は、結局全快に三年かかってしまった。その後服飾の専門学校に進んだが、ひょんなきっかけで担任の先生が定時制高校を紹介して下さった。思いがけない話に胸の奥にひっかかっていたモヤモヤが吹き飛んで、嬉しさで一杯になった。それが三田高校だった。定時制という響きも不思議と抵抗がなかった。年齢の違うクラスメートや学年の違う人達とも気軽に話合えたし、〝卒業〟を目標にそれぞれ頑張っていたと思う。勿論嫌な事もあったはずなのに、思い出すのはその後の週末の帰りに友達と喫茶店で話込んだ事や一味違った学生生活の数々である。今は普通のOL生活を送っているが、旅行が好きで国内ではあるけれどよく出歩いている。特に京都が好きで、今年も春に出かけ思いがけず御所の特別公開にぶつかりにんまり…しだれ桜も見事に咲いていてちょっぴり得をした気分になった。

社会に出て改めて自分を見詰め直す機会も数少ないが、〝原点に還る〟という言葉は私にとってまさしく三田高校時代を振り返る事なのかもしれない。

オセンチ山によせて

44年卒業　川下省二

私達が三田高校を卒業してはや二十七年の歳月が流れました。先日、同級生四人と歓談する機会を持つことができました。日頃のご無沙汰を詫びる事から始まり、近況報告、そして話は、三田高校時代へと進んでいきました。お世話になった先生方、グループで行った旅行、そして同級生の事などすべてが昨日の事のように思い出されました。ひとつの思い出を、四人の記憶を頼りにつなぎ合わせると、その時の一挙一動が鮮明に蘇ってまいります。青春時代の楽しかった事、悔いの残っている事、それらが複雑に入り乱れて、一つのドラマのように感じられました。「あの頃のおまえは」と私に批判が集中してきたのには、予期していたものの閉口しました。数々の思い出を追いつつ夜が明けるまで語り合いました。ブラジルNEC幹部で世界中を駆け回っている橋詰氏、割烹料理店を経営している丸山氏、防災機器に携わっている石井氏、建築設計事務所をやっている私。第一線で活躍している同窓生に負けぬよう頑張らねばと、心を新たにした一日でした。末筆になりますが、青葉会の運営に携わってくださっている皆様に深く感謝申し上げます。

想い出

39年卒業　桐澤保勝

私は昭和三十五年に入学しました。一二〇人位合格し、女生徒が多く男子は一、二組十五人位づつ振り分けられ、三組は女子のクラスでした。皆、学力があり、なかでも竹上は日比谷高校へ入れる程入学試験が優秀な成績だった、と二年迄担任だった松尾先生が言っていました。私は勉強より遊んでばかりで、四年間気ままに楽しく通学しました。学校に馴れてからはおせんち山に煙草を吸いにいき、暗い所で男子学生のもめごとを幾度か仲裁しました。又、授業中何人かで飲みにいったり、学校の近くのそば屋や寿司屋の二階で忘年会、新年会、飲もう会と何回かやり、皆羽目もはずしました。今思うと、学校に知れなかったのが不思議な位です。仲間は黒川、竹上、井上、中平、砂山、森、石塚、山本のりよし、高野、といつもこのメンバーでした。三年からの担任の田崎先生はまじめすぎで、我々一部生徒と口を利かない時もありましたが、卒業後は仲良くなっています。暫く会っていない小野田、関根、林、小島、元気か。黒川の家にはいまでも毎日曜日飲みに行っています。石関、佐藤、植木、須磨、岡部、鈴木、中村、伊藤、安田、内田主事の各先生は、三十三年位前の当時の顔で懐しく憶えています。今野校長は健康に気を付けてと生徒への思いやりを忘れぬ偉い先生でした。四年間いろいろな事がありましたが、三田高は私の母校です。今でも人事な友人が多くいます。青葉会の役員の皆様、五百川会長の御苦労をお察ししながら語らせていただきました。

一九九六年九月二十二日

ダンス映画と漱石の『こころ』

41年卒業　渡辺眞悟（東京新聞サンデー発言欄より）

社交ダンス教師の業界に身を置く一員として、現在のダンス界がどうとらえられているのか、話題がてら映画館に足を運んだ。「Shall We ダンス？」。これが近ごろの邦画の水準をはるかに超える、実に見事な出来栄えではないか。

この映画を見た後の、心のすみずみまで洗われるようなすがすがしさは、一体どこから来るのだろう？

自分がダンス教師であることを忘れて、映画館を後にしてからも、僕はハタと考え込んでしまったのである。

駅前のごくありふれたダンス教室に集まる生徒と、これを教える教師との師弟関係を縦軸に、生徒それぞれのダンスに対する思い入れを横軸に、物語は展開する。

ところで、ここに登場する主役の中年サラリーマンが、美しきヒロインのダンス教師と出会い、別れに至るまでの映画のテーマは、夏目漱石の『こころ』に出てくる「先生」と「私」との師弟関係そのままであることに気付いた。

その共通点を上げてみよう。――。

まず双方とも生徒の方から先生を慕って接近を試みる。しかし、二人ともやんわりと、あるいははっきりと、近付くことを断わられる。

なぜならば『こころ』の先生もダンス教師も、過去の人間関係につまずいて、いまだに立ち直れぬために、他人を迎え入れる余裕がなかった。

それでも、真剣に先生を見習おうとして近寄ってくる生徒の態度にやがて心を開き自己の過去を赤裸々に語るわけだが、それを手紙で伝えるという方法も全く同じ。

人間に対する信頼を、それぞれの生徒によって取り戻すことができた二人の先生は、同時に、生徒との別れをも告げることになる。

ダンスのヒロインはもう一度英国へ勉強に、『こころ』の先生は天国へと、それぞれの過去を清算し、新たな意志で旅立つ。

「Shall We ダンス？」は『こころ』に裏打ちされた作品と僕は推測したのだが……現実の世界では、この映画の制作を出会いに、監督とヒロインはめでたく結ばれたと聞く。（東京都足立区）